

与格構文とその周辺

まつもと ひろたけ

(1) 松本 2005「与格主語現象管見」で、いわゆる与格主語、与格構文のことをかんがえたさいに、感情形容詞、感覚形容詞の連用形や、機能上それに相当するその他のかたちに オモウ、感ジル のような動詞がつづいて、松本のみかたでは、文中における機能の点で、形容詞＋述語がにひとまとまりのあわせ述語になっている、ふたとおりのくみたてをさしだしておいた。簡易化してそれをしめせば、つぎのようなものである。

- ・ 梨花はなな子をかわゆくおもった。
- ・ 多摩の山を私は美しく感じた。
- ・ 梨花にはなな子がかわゆくおもわれた。
- ・ 多摩の山が私には美しく感じられた。

主語－述語の格関係にしぼってしめせば、前二者が、ダレダレガ ～ク オモウ(感ジル) なのに対して、後二者は ダレダレニ ～ク オモワレル(感ジラレル) である。つまり前者が能動構文、後者は受動構文のかたちをとっている。ただし、後者には、感ジラレル、オモワレル のような形態論的な受動形のほか、オモエル、ミエル のような、可能動詞や出発点的に受動系の接辞をもつ自動詞もでてくる。

(2) うえにあげた二種類のほかに、用例はあつまりにくい、さらに二種類のくみたてが追加される。ひとつは ダレダレガ ～ク オモワレル(感ジラレル)、さらに、ダレダレニ ～ク オモウ(感ジル) という、呼応関係のねじれたくみたてである。ここにねじれ現象として生じているのは、あわせ述語の動詞部分のかたちからみて、ボイスをめぐるコンタミネーションである。動詞の能動形によって能動構文が、受動形によって受動構文がつくられれば、コンタミネーションは生じていない。しかし、名詞部分の格形式からは、能動構文を受動形が、逆に受動構文を能動形がになっているようにみえるところがあるとしたら、そこにはコンタミネーション現象の存在がかんがえられる。こうして、～ク オモウ(オモワレル) のようなあわせ述語は、感情・感覚の主体をしめす名詞部分との相関、呼応に、以下のよっつの種類がみとめられることになる。はじめのふたつは(1)にあげてあるので、うしろのふたつをこの順に紹介する。なお、ダレダレ と

いう名詞部分は論旨をわかりやすくするため、主格、与格の格形式で図式化したのが、実際の用例では、ほとんど、ダレダレハ、ダレダレニハ と、とりたてをうけている。このハによって、与格名詞部分は主語性を顕在化させることになっている。

- ・ ダレダレガ ～ク オモウ(感ズル)
- ・ ダレダレニ ～ク オモワレル(感ズラレル)
- ・ ダレダレガ ～ク オモワレル(感ズラレル)
- ・ ダレダレニ ～ク オモウ(感ズル)

(3) 動詞部分が受動形なのに、名詞部分が与格接辞をふりおとしているばあいを見ると、動詞部分には受動形とともに、オモエルのような自発形式がでてくる。また、名詞部分はとりたてをうけた Nハ になっている以外では、調査不足のため Nガ は確認できなかったが、従属節内の Nノ形がみられたので、それをあげておく。

- ・ ちらほら梅の咲きそうな裏庭へ出て、冷たいえりもとにそばえる軽い風に吹かれていると、お島はしきりに都の空が恋しくおもいだされた。(徳田秋声)
- ・ お島たちは自分たちの浮きあがるのは、何の造作もなさそうに思っていた。(徳田秋声)
- ・ たがいの思うことを遠慮なく言い合って、泣いたり笑ったりした昔の方が林之助はいつそ懐かしいように偲ばれた。(岡本綺堂)
- ・ ここも通りに向いた方は、事務机や椅子がおいてあり、奥は六畳の茶の間と八畳の居間で、特に銀子のうらやましく思えたのは、文化的にできている台所と浴室であったが(略) (徳田秋声)

このくみたてでは、可能動詞文の変化のある段階になぞらえることができる。オ島ニハ都ノ 空ガ 恋シク オモイダサレタ. というのが可能文で、太郎ニハ 字ガ ヨメル. の段階だとすれば、うえにあげた例は、それにつづく、太郎ハ 字ガ ヨメル. の段階といえる。もっとも、動詞のかたちに、可能動詞のような変化は生じていない。そのことと連動して、当然、都ノ 空ガ が 都ノ 空ヲ になるような、可能文のつぎの段階 太郎ハ 字ヲ ヨメル. にあたるくみたてにはうえの例は到達していない。しかし、可能文の格関係のさまがわりと同質の変化がここに生じているのもたしかであろう。動詞部分にあらわれる オモエル がかたちのうえで可能動詞形なのも、可能文にさきに生じた与格主語ばなれが、ここでくりかえされてきていることと無関係とはいえない。

(注) つぎの例の「私自身」はハダカ格で、意味上は主語的といえても、まことの主語かどうか問題だが、動詞部分とのかかわりの点で、やはり与格性をふりすてているようにみえる。

- ・ それ故、この横光利一論は、三篇を基礎として作り上げられたもので、私自身少し危かしく感ぜられている。(正宗白鳥)

(4) 以下にあげる例は、名詞部分がヒトそのものをあらわさなくて、ダレダレノ 目のように人体部分をさしめしているばあいである。これらの例では名詞部分に与格形式がたもたれている。

- ・ (略) 濁酒に酔って、俵の上でぐくりぐくりと眠っている小野田の坊主えりをした大きいあたまが、お島の目にはみじめらしくみえた。(徳田秋声)
- ・ まだ自分の店にすわった経験のない小野田の目にも、そうしてできあがった店のさまが物珍しくながめられた。(徳田秋声)
- ・ お島の目にも、あいそのいい青柳の人柄は好ましく思えた。(徳田秋声)

述語の動詞部分は、まず第一に、ミエル、ナガメラレルのように視覚活動をさしめしているが、オモエルのような心理活動をあらわす動詞もでてくる。この種の与格形式は、ヒト名詞のばあいとちがって、非与格化して主格形式になることがみられないこともあって、うえの例文の与格形式を与格主語にかぞえられることはむずかしいだろう。

述語形式の動詞部分がはずされた、オ島ノ 目ニハ ミジメラシカッタ、とか 小野田ノ 目ニモ 物珍シカッタ、といういいまわしが、ここでも可能なはずである。松本1979「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ」には「せみのね、いろづいた麦、みみにも目にもじりじりとあつく(略)」（徳富蘆花）、「冬の夜風がくちびるにつめたい」（石川達三）、「それがあせばんだ勘助の皮膚にこちよかった」（井上靖）のような例をあげて、それに「感覚点のむすびつき」となづけてある。このなづけは今回とりあげているような、心理的な状態をあらわす形容詞と心理動詞とのくみあわせには適切ではないだろう。形容詞も動詞も心理的な内容であるため、名詞部分の 目ニ も単純に視覚をしめすものではなくてきて、生理＝感覚のレベルから心理活動のよってたつところをさしめず方向へとかたむいているからである。

名詞部分の選択自体が感覚点をあらわす人体部分名詞からはなれて、ダレダレノ ココロニ(ハ) のようになると、ダレダレニ(ハ) とのへだたりがさらにちぢまってくる。この辺の事情は、奥田靖雄「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」で、ダレダレノ ココ

ロヲ ナヤマス のような連語を ダレダレヲ ナヤマス の類とおなじく、「心理的な状態変化をあらわす連語としてあつかうことができる。」としたうえで、「事にたいするはたらきかけをあらわすものとしてあつかうことをもゆるすだろう。」(『資料編』61 ページ) とのべているのが参考になる。

- ・ 一緒に乗りこんだお島の心には、まだ見たことのない田舎の町のさまがいろいろに想像されたが(略)(徳田秋声)
- ・ (略)皮膚のおおじろい、手足などのきゃしゃなそのからだがお島の感覚には、さわるのが気味わるくも思えていたのであったが(略)(徳田秋声)

(注) これらの ココロ、感覚のような抽象名詞、さらに、念のため ~ノ 目ニ (ハ) などにも与格ばなれがあるのかどうか確認する必要がある。

(5) 名詞部分が与格形をとって、動詞部分が能動形というのは、(3) にみたのが与格主語ばなれだったのちがって、逆に与格主語の再生、復活であるかのようである。

- ・ 許されてめずらしい講演を聞きに出かける捨吉には、その道を遠いとも思わなかった。(島崎藤村)
- ・ 師匠の家で彫り物ばかりしている私にはなかなか珍しく感じました。(高村光雲)
つぎの例は与格のところダレダレへ という(方)向格になっているため、学者ニ感じサセル のような意味あいなのかともうたがわれるが、それよりも、うえの二番めの例と同一のくみたてという面があるだろう。
- ・ そこで、私の写生した図の中の花が、欧州の学者へは極めて珍しく感じた訳であらう、(略) (牧野富太郎)

うえの例文の向格はもちろん、与格のほうであっても、小論の筆者などにはすぐにはできにくいかたちだが、かき損じ、いいまちがいときめつけるまえに、このようなくみたてが存在することをみとめて、この種のコンタミネーション、そして与格主語現象にからんできそうなことどもを、ラレツ的にだがとりあげてかんがえてみたい。

(6) ここにみるコンタミネーションが生じることにかかわっていそうなのが、松本「与格主語現象管見」でふれた、形容詞述語文にみられる、感情・感覚の主体の表現に関する両様のでつづきである。そこには、梨花ハ ナナ子ガ カワユイ、~ 梨花ニハ ナナ子ガ カワユイ、のように、ダレダレハ ナニナニガ (形容詞述語)、と、ダレダレニ

(ハ) ナニナニガ (形容詞述語) のふたとおりの構文が、意味的なちがいはらみながらも共存していた。そこでは ダレダレハ と ダレダレニ(ハ) という名詞部分のかたちづけのちがいは、述語形容詞のかたちになんの影響もおよぼしていない。そこにみられた形容詞が、動詞とくみあわさってあわせ述語になったときも、さきにしめたように、動詞部分が ～ク オモウ (オモワレル) などと能動形、受動形のどちらでもあらわれることは、あわせ述語のばあいにも、名詞部分のふたとおりのかたちづけのちがいが、なんら述語のかたちのちがいをもたらししていないことを、つまり動詞の形態論的なボイス形式のちがいによって、構文上のボイス表現がになわれているのではないことをしめすものである。つまり、あわせ述語の動詞部分はボイス的な対立がばやけてきている。動詞部分は陳述をになう役わりを演じてはいるが、それ以上ではない。このことから、うえにみたような形容詞+動詞のあわせ述語において、コトガラ面を分担する中心語が、動詞でなくて形容詞のほうであるということもいやすくなりそうである。

(7) あわせ述語の動詞部分を受動化しないで、名詞部分に ダレダレニ(ハ) のような与格形をたてて主体をさししめすのは、与格主語をもつ与格構文にかかわる現象といってい。動詞部分を受動化して、与格でしめされる主体があらわれるのなら、それはことあたらしく与格構文などという必要はなく、単に受動構文といっておけばすむことである。一方、うえのように動詞が能動形のままで述語となって、与格主語をとる構造のほうは、ボイス対立にかかわりなく主語の格形が修正をうけているといえる点で、与格構文という名でよぶのにふさわしいのではないか。

この種の与格主語のかたちは、意味=内容面において、ワタシガ オモウ とか ワレオモウ という主格～名格主語のあらわれるいいまわしの、シテ的な主体の積極的な行為をさししめそうとする傾向をけしきって、非能動文化するために有効にはたっているとおもわれる。(5) にあげた例文の 捨吉ニハ は、捨吉ハ だと思ワナカッタ が、オモオウト シナカッタ のような意味にとられる可能性が生じるが、それをさけることができる。つぎの 私ニハ…感じマシタ にもおなじ傾向はあるだろう。

このような非能動主体化は、動詞部分が受動化した ワタシニ(ハ) オモワレル へもおよんでいて、この種の オモワレル、さらに オモエル が自発の意味をあらわしていることは、これまでにかずおおくの指摘がある。

(注) ラジオ中国語講座の訳しかたの指導で、カノ女ハ テガミヲ ミツケナカッ

タ、という直訳（中文省略）が、ミツケヨウト シナカッタ の意味にとられないように、カノ女ハ テガミガ ミツカラナカッタ、をすすめていた。ここには与格構文 カノ女ニハ テガミガ ミツカラナカッタ、もありうるが、動詞をミツケル のままにした与格構文は無理ではないか。

(8) ここまでは受動形とか受動構文とよんできたが、ここにあらわれる オモワレル、感ゼラレル のような心理動詞の受動形はいままでみてきた例のばあい、受動文としてあらわれているのではなくて、意味的にはこの自発といわれる領域に属している。その結果、さきにふれたように、オモワレル でなく オモエル という可能動詞のなかたちがでてくることにもなるといえる。

受動文とこれまでよんできたかたちは、正真正銘の受動文であるならば、いくらシテをあらわしていても ～ニ(ハ) の名詞部分を主語的にあつかうことなどおもいもよらず、受動文の補語とみなくてはならないはずである。また、補語だと当然、-ハ の部分の義務性などきえてなくなり、結果として -ハ はふりおとされることが普通になる。

与格主語性が問題になるのは、その種の受動文のシテ補語とはちがった役わりが、文全体との、とりわけ述語とのかかわりのなかでとりだされたばあいだろう。

(9) 動詞を受動＝自発形化しないまま与格主語をとる構文が、歴史的にみてどのように位置づけられるかの問題は、別に考察しなくてはならないとしても、動詞のかたちがもとのままで、主体表現の格形式だけを変更して、構文的な意味が能動的とみられないように、非能動性が明示されるように変更するという、一方のやりかたにくらべて、もうひとつの、りちぎに動詞の形態論的なかたちを名詞部分の格形に連動、呼応させるてつづきのほうは、なんとなくあたらしいもののようにみえる。動詞の語形のさまざまな語彙＝文法的な対立のなかから、能動文－受動文の対立にみちびかれつつ、動詞の形態論的な能動形－受動形の対立がぬきだされ、整備されて、ボイスのカテゴリーが成立したということを歴史的にあとづけていくことは、いまのところむずかしいとしても、現代日本語にみられるこのような現象は、ふるくからある日本語の文構造のひとつのあらわれとか、過去の構文的なしくみの遺物 relict とでもいえる面があるとしたらおもしろい。

たとえば、つぎの 感ゼラレナイ、思エナイ といううちけし動詞は、感ゼラレル、思エル なら自発といえるのに対して、感ジルコトガデキナイ、オモウコトハデキナイ と

いう可能—不可能のワクにうつっているようにみえる。

- ・それは時代の相違上止むを得ないとして、ペアトリチェの愛の光が私などには痛切に感ぜられないのはどういう訳であろうか。(正宗白鳥)
- ・竹で胴を編み、黄菊白菊で埋めつくし、人形首をつけた菊人形も、わたくしには美しいともおもしろいとも思えませんでした。(皆川博子)

この現象を一般化すると、たとえば「自然可能」のようななづけをいかしての、自発と可能をあわせたカテゴリーがなりたつ。そこに「受動」がどのようにからんできて、与格主語ばなれした受動文のシテ補語が成立したのかが問題になる。

(10) この種の与格構文は、うえにみたような形容詞を中心語とするあわせ述語をもつ構造、ダレダレニ(ハ)～ク オモウ、感ジル の一群にかぎれば、例外的な構文現象であることはたしかで、一部は量的なあらわれかたからみて、あるいは誤用として処理されることもありそうである。

しかし、うえのようなあわせ述語構文にかぎらず、他の構造においても、主格主語をとるのがふつうの構文、あるいは主格主語をとることのできる構文が、与格主語、与格構文ででてくることがある。以下の例は、いずれも生理現象、心理現象や意志によるコントロールのきかないなりゆきをさしめしているが、与格主語的な ダレダレニハ によって、シテ的でない非能動主体が文の意味構造に参加していることがきわだたされることになっている。

- ・ 大震災でひどくなって、白蛇が出るのは柳島の面影なんかありゃアしません。昔女には涙が出るんです。(篠田鈺造)
- ・ それに比べると、銀子には親を見る目もようやく開けかけており、(略) (徳田秋声)
- ・ それでも工には心配になった。(田山花袋)
- ・ その微笑がまた純一には気になった。(森鷗外)
- ・ 婆あさんの質撲で、身ざれいにしているのが、純一にはひどく気に入った。(森鷗外)

うえの例文にみられる再帰構文性や、形容詞を中心とするあわせ述語とみられる側面などにも注意しながら、用例をひろげてこの種の与格構文のあらわれる意味範囲を確認する必要があるが、さきにみた ダレダレニ(ハ)～ク オモウ、感ジル も、ここへと連続しているかぎり、誤用とまではいいにくい面がみえてくるようである。これに対して、

(3) であげたもう一方の 銀子ノ ウラヤマシク オモエタ… も、銀子ニ ウラヤマシク オモエタ… の与格構文にくらべ、一般的とはおもわれない。ここではなお、与格構文のほうが主流といえる。

(注) ここにあげた例文の与格主語的な ダレダレニ(ハ) は、(5) にあげたものにくらべてよほど自然だが、与格助辞のふりおとしもごくふつうだろう。うへの例文のうしろの二例について、～ニ がおちた例をあげておく。したの第二例は ダレダレニ ナニナニガ 気ニ イル から、ダレダレガ ナニナニヲ 気ニ イル へとかわって、可能文のさまがわりとおなじになっている。

- ・ 私はやはり気になるので、以前には全く別の目的で読んだ地形に関する本を取り出して見ると、(略) (串田孫一)
- ・ 私は梓について特別調べることもなく、(略) 秋になると紐のように長く垂れる実などを気に入って (略) (甘槽幸子)

(11) なお、与格構文の脱与格構文化は、可能動詞文のばあいには代表させてかんがえておいていいかとおもわれる。そこに生じるのは与格構文 (太郎ニ 字ガ カカレル) の他動詞文化 (太郎ガ 字ヲ カケル) だったが、他動詞文化はつぎの例にみるように、与格構文以外の非他動詞文からの変換にもみられる傾向であろう。

- ・ 僕あちょっと失敬するよ、じき帰るから猫にでもからかっていてくれ給え (略) (夏目漱石)
- ・ 榊はまた子分が親分に対するような濃厚な心をもってあの先輩に信頼していた。(島崎藤村)
- ・ (略) あるいは手を引合って歩く男女に尾行して、そのささやきをぬすみ聞きする事をよろこぶのであった。(永井荷風)

うへの例文にあらわれる格形式の変化は、～ニ から ～ヲ という、単純な与格-対格間の修正だけである。一方、可能構文などにみられる格表示の変更は、単項のあいだの対応だけでなく、二項間の対応におよんでいて、主体表示が ～ニ から ～ガ、対象表示が～ガ から ～ヲ へと修正されている。ここにみられる二格は、一方が対格的、他方が主体的と意味=内容面では区別されるものの、ともに他動詞文化のすすみとともに他の格形式へと修正され、結局消去されるという同一の方向性を共有している。

(12) いずれにしても、与格構文の脱与格構文化は、主語のかたちづけの面から、また、あいて＝対象的な与格をかかえる自動詞文の他動詞文化は、補語のかたちづけの面から、ともに二格の地位をひくめようとしているかのようである。三上章 1958「基本文型論」ほかにいう、「甲型と乙型」の「乙型」には、与格のあつかいや与格構文の問題がからんでいるとみられるが、三上によれば「乙型」は‘minor type’とされている。うえにみたように、脱与格構文化、他動詞文化が刻々とすすむ二格ばなれ現象と関連づけられれば、「乙型」の‘minor type’性も当然だとおもわれる。

しかしながら、表現のてつづきのレベルでなく、現実のレベルに与格構文的内容(与格構文にもりこまれるような内容面をかながえたとき、それに対応するデキゴト)が存在するとしたら、たとえ与格構文や与格形がなくなったとしても、その内容を明示的に表現する必要にせまられるばあいはのこっていることがあるはずである。その一方で、与格構文の脱与格構文化、その中心をしめるとみられる他動詞文化も、さきにふれたように進行しつつあるとみられる。こうした他動詞文化のうごきのなかでだが、与格構文や三上章の「乙型」とのからみでとりあげる必要があるとおもわれるのが、他動詞文ばなれの現象である。

(13) 宮島達夫 2006「言語研究における主観と客観」をみると、「中相的表現」として、他動詞 ウル が 本ガ売ッテイル のようにもちいられる実例をあげている。小論でさしだしたいいくつかの例と同様、誤用か正用かの問題がでてくるし、「どのような動詞に可能か、また、いつからあるのか」が問題になることもふれられている。宮島論文にある例から ウル の例をかり、また、ほかの動詞の例をつけたしておく。掲載スル は漢語動詞のため、自他両用だった時期があったのかもしれないが、すくなくともいまではふつつうには他動詞としてつかう。

- ・ 子供がかぶって遊ぶのには手頃な大きさのが売っていたけど、欲しくはないか
(太宰治—宮島 2006)
- ・ (略) 去年の祭があんまり派手にやりすぎちまって、あとで勘定がおつつかねえ。(三遊亭円生)
- ・ その、安藤鶴夫個人雑誌<燭涙>十月第二輯というやつが、克平さんから送ってきた。(安藤鶴夫)
- ・ 帳場に方々の電話番号の書いた紙があるんですよ。(永井荷風)
- ・ (略) 熱心な読者が、敗戦後の混乱時代に、粗悪な仙花紙の雑誌に、僕の短編

小説が掲載しているからとて、何篇も届けてくれた。(芹沢光治良)

つぎの例の ハイル は他動詞ではないが、ヒトの行為面がきりすてられて「中相的表現」化している点ではうえと同様である。「どのような動詞に可能か」をかんがえるときは、この種の行為的な自動詞もとりあげることになるだろう。

・ おふろがはやくはいっちゃうじゃないですか。(NHK TV 2006.7.26)

これらの中相的表現が、出発点的には能動主体の積極的な行為をあらわす他動詞・自動詞(全体を行為動詞とまとめたいところだが)によってになわれている。そこでは、その意味・用法の中心において動作・行為のシテをあらわしていた名詞のガ格のかたちが、名詞の意味クラスの特徴にささえられて、非シテ的な意味であらわれている。

なお、うえの文例、電話番号ノ 書イタ 紙 ににたいいまわしとして、ふるくとりあげられた キップノ キラナイ カタ がある。小論にのべたことと関連づければ、行為的な他動詞が、ヲ格を支配するのではなく、ガ格とノ格のちがいはあるものの、主格的な格形式とかかわる点で、本ガ ウッテ イル にも キップノ キラナイ カタ にも、行為他動詞文の「中相的表現」へのうごきが、つまり与格構文にみられる非シテ主語現象につながるうごきがあるのだろう。

(14) いまのところ「中相化」ははなしことばを中心にあらわれる現象である。そのため、標準＝文章語の規範にてらして、いかがなものかという感じでうけとめられているといい。しかし、言語変化、文法化がまずはなしことばにはじまり、ときがたつてかきことばで認知されるのも、またふつうのことである。

可能表現のあとをおって自発表現にも、与格主語をふりすてる、他動詞文と合流する方向へとすすむくみたてがあらわれてきている一方で、うえのような他動詞の非他動詞化、「中相」化がみられるというのは、他動詞文の根幹をになっているはずの他動詞が、部分的にしる腐蝕現象をおこしていることをしめすものだろう。三上『基本文型論』ほかでいう「甲型と乙型」の文タイプの対立は、一方的に甲型へとかたむいていくものでもないようである。

山口巖 2005『ロシア文法の周辺』に「また能格言語には、活格言語のばあいと同じように、同じ動詞が他動の意味にも自動の意味にも用いられるものが数多くあります。これをクリモフは *diffused verbs* と名づけています。」(230 ページ)とのべられているように、動詞における自他未分化、同形性には、活格タイプ言語へとさかのぼる面がある。だとすれば、ウル、アル、オクル などの他動詞が自動詞用法を派生させるうごきには、

一種の先祖がえり現象がみとめられるとはいえないか。

また、与格主語的な成分のあらわれる与格構文も、述語動詞に非意志的、非行為的な生理・心理的現象や状態をあらわす感覚動詞、感情動詞や知覚動詞がでてくるとなると、活格タイプ言語における動詞分類や、それに連動した文の意味的な分類の問題と直接かさなってくる面がありそうである。

以上、与格主語も中相的表現も現代日本文法の周辺現象だが、内容類型学の観点からは両者がおなじひとつの線上に位置しているといえるのではないかということ、不十分ながらさしだしてみた。

参考文献

- 奥田靖雄 1968～72 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」(言語学研究会編 1983『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房)
- クリモフ, Г. А. 1977 石田修一(訳) 1999『新しい言語類型学 活格構造とは何か』(三省堂)
- まつもと ひろたけ 1979 「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ—連語の記述とその周辺—」(言語学研究会編 1979『言語の研究』むぎ書房)
- 2005 「与格主語現象管見—ヒト名詞の二格の用法から—」(類型学研究会 2005『類型学研究』創刊号)
- 三上 章 1958 「基本文型論」(三上章 1975『三上章論文集』くろしお出版)
- 宮島達夫 2006 「言語研究における主観と客観」(言語学研究会 2006『ことばの科学』11 むぎ書房)
- 山口 巖 2005『ロシア文法の周辺 一般言語学への招待』(日本古代ロシア研究会)

(小論は 2006 年 8 月白馬言語学研究会軽井沢合宿で発表したものに若干用例をふやしたほか、記述にもてなおしをくわえた。)

(つれたり) たまたま校正中にみたキブリク Кибрик, А.Е. 2001『一般・応用言語学的諸問題概説 Очерки по общим и прикладным вопросам языкознания (副題略)』(モスクワ、第2版) のなかに、能格タイプのアルチ語で オカアサン erg シンバル nom タタイタ の他動詞構文も シンバル nom タタイタ(タタカレターロシア語訳) の自動詞構文も動詞のかたちがかかわらないことが、(つまり、本ガ ウッテ イル にあたるいかたがアルチ語ではふつつうであることが) 紹介されていた(207-8 ページ)。